

ルネ・ヴィヴィアン『雌狼を連れた貴婦人』における男と女—その1—

ルネ・ヴィヴィアン『雌狼を連れた貴婦人』における 男と女—その1—

中 島 淑 恵

はじめに

『雌狼を連れた貴婦人 (*La Dame à la louve*)』¹は、1904年にアルフォンス・ルメール社から出版されたルネ・ヴィヴィアン (1877-1909) の短篇小説集である。ヴィヴィアンは1901年から詩集を発表し始め、1904年にはこの小説集以外にも、小説『一人の女が私の前に現れた (*Une femme m'apparut*)』や、サッフォーと同じ古代ギリシアの女性詩人たちにこと寄せた『レ・キタレーデース (*Les Kitharèdes*)』²を発表し、また詩集『群盲のヴィーナス (*La Vénus des aveugles*)』を出版するなど、その短い創作活動のうちで、もっとも充実した時期がこの年であったといっても過言ではない。この年はまた、ヴィヴィアンの実人生においても、1901年から親交のあった、ヴィヴィアンにとっては保護者的存在のエレーヌ・ド・ズイレン・ド・ニーヴェルト男爵夫人 (1863-1947) との関係も良好で、その庇護下で小説集『根付け (*Netsuké*)』を出版している。ロダンがその頭像を制作したのもこの年であったと言われている。さらに、レスボスの伝説の地ミティレーヌを、愛人ナタリー・クリフォード＝バーネイ (1876-1972) と訪れたり、パリに同性愛の女性作家コミュニティを作ろうと企図したりと、精力的に行動した時期でもある。しかし、バーネイとの関係の復活は、やがてズイレン夫人との絶縁をもたららし、以後ヴィヴィアンはパリの自宅に引きこもり、ごく親しい何人かの友人としか交際せず、食物を拒否し、おそらくは緩慢なる自殺と言ってもよい死のときを迎える。

今日では一見忘れ去られた感のあるヴィヴィアンの諸作品ではあるが、この『雌狼を連れた貴婦人』は、1977年にレジヌ・ドフォルジュによって再版されたほか、2007年にはガリマー

1 本邦未訳のため、邦題は便宜上筆者が翻訳した。以下、個々の作品の表題も、筆者の翻訳による邦題を示し、初出時のみ括弧内に原題を付すことにする。また、本稿執筆に当たっては、1977年のドフォルジュによる再版 (Renée Vivien, *La Dame à la louve*, Deforges, 1977) と、2007年のガリマル社フォリオ叢書の再々版 (Renée Vivien, *La Dame à la louve*, Gallimard, 2007) を参照した。以下作品からの引用はこのフォリオ版より行ない、頁数のみを示した。

2 『レ・キタレーデース』は、これらの詩人たちの作品の翻訳というよりは、ヴィヴィアンの自由な解釈による創作の性格が強いものと思われる。特にピンダロスやコリンナに詩を教えたと言われているミルティスの詩は現存しているものがないと言われており、出典の問題や、ヴィヴィアンが古代ギリシア語をどの程度理解していたかという問題も含めて今後精査の必要があるものと思われる。

ル社の普及版文庫であるフォリオ叢書の一巻として再々版されてもいる。それはあたかも、この世紀末を彩った薄幸の女性詩人に、常に根強い一定の読者層があり、世代を超えた波のうねりのように、忘却に抗い、時として再評価の洗礼を受け直す榮譽を与えられているかのような印象を与える。小論では、この短篇小説集に収められた作品のうち、当時のヴィヴィアンの性向あるいは風評とは裏腹に、異性愛に基づいて描かれているものに注目し、そこに描かれる客体としての女性像に、この詩人の意図がどのようにこめられているかについて探ってみることにしたい。

1. 『雌狼を連れた貴婦人』の構成と特徴

『雌狼を連れた貴婦人』は、17篇の短篇小説よりなり、それぞれに趣の違う女性が主人公として描かれている。このうち、一人称の男性が、自分の出会った女性について語っている物語は、表題作のほか「渇きが嘲笑する…*«La Soif ricane…»*」「宝石の残酷さ*«Cruauté des pierreries»*」「森の裏切り*«Trahison de la forêt»*」「うらはらの慎み*«La chasteté paradoxale»*」「輝ける娼婦*«La splendide Prostituée»*」「鱷女*«La Saurienne»*」「はしばみのような瞳の女*«Brune comme une noisette»*」の8篇であり、これらの作品は、その内容から、韻文・散文を含めたヴィヴィアンのほかの作品群とこの短篇小説集を大きく隔てる特徴を形成しているといっても過言ではない。というのも、前述の通りこの時期のヴィヴィアンは、レズビアン・コミュニティの形成を積極的に画策したり、ズイレン夫人との特別な親密さをあえて隠すこともなく、また、レズビアンの聖地ミティレーヌを誘惑者バーネイと訪れたりしていることから明らかに、「女どうしの恋」の主体的な唱道者として振舞っているのであって、ボードレールの女性嫌悪を髣髴とさせるような、ことさらに男性を嫌悪する素振りすら数多くの作品の中で明らかにしているからである。

そのようなコンテストに照らして考えれば、『雌狼を連れた貴婦人』に収められている一人称の女性が、自己の体験として物語を語る「沈黙の姉妹*«Les sœurs du silence»*」や「セイレーヌを魅了するプサッファ*«Psappha charme les Sirènes»*」、明らかに女性である一人称が、自己の見解を述べている「女の友情*«L'amitié féminine»*」や、戯曲のかたちをとった「シュヴァンヒルド*«Svanhild»*」、あるいは完全な三人称の物語として描かれている「ヴァスティのヴェール*«Le voile de Vasthi»*」や「泡のように白い女*«Blanche comme l'écume»*」の方が、同時期のヴィヴィアンのほかの作品と共通する特徴を色濃く帯びていて、逆にいえば先に述べた男性一人称の語りの作品群のような特異性を有してはいないように思われる。

また、他の作品群では、一人称の男性が何かを語る、という形式をとっているものはなく、この時期のヴィヴィアンの語りの実験の一端をうかがう上で興味深い。当時のヴィヴィアンにとって、男性・女性の区別という問題は、今日的な意味でのジェンダーにまつわる問題意識の

様相は未だ呈していなかったにせよ、ヴィヴィアンなりの切実な問題として、それが創作活動の根幹にあったことは明白である³。また、単純な自己の投影としての一人称を脱し、明らかに架空の一人称を構想するという姿勢も、いくつもの筆名を駆使して創作を行なったこの時期のヴィヴィアンの、これもまた今日的な意味での問題意識ではなかったにせよ、「語る主体とは何か」という問いを顕在化しているかのように思われる。とくに、小論で取り上げる8篇のうち7篇までは、表題の下に「～によって語られた」と付記があり、冒頭から男性が語る物語であることが明らかになっている。以下、まず初めにこのような男性一人称の語り手の特徴について考察を行ない、さらにはその語りによって紡ぎ出される客体としての女性が、それぞれの作品においてどのように描かれているかについて検討を加えることにしたい。

2. 固有名をめぐって

男性一人称で語られる8篇の物語において、それぞれの語り手が「語る私」としての自己をどのように規定し、記述しているかについて考察するために、物語の冒頭にみられる固有名、また物語の中心をなす女性の固有名と、それぞれの語り手との関係の設定について確認しておくことにしたい。

「雌狼を連れた貴婦人」は、表題の下に「パリ、ダーム通り69番地、ピエール・ルノワール氏によって語られた (*Conté par M. Pierre Lenoir, 69, rue de Dames, Paris*)」という付記があり、いかにも実在の人物によって語られたかのような外観を装っているが、以下の物語においてこの人物名や住所は特に大きな意味を持つ訳ではない。この付記は、物語に「真実らしさ」を付加するための単なる装置であるように思われるが⁴、語り手が男性であり、住所と名前からみておそらくフランス人であることが示唆されているのはわかる。このほか、「渴きが嘲笑する…」の付記は「ジム・ニコルスによって語られた (*Conté par Jim Nicholls*)」とだけあり、この表記も、語り手が男性の、おそらくは英国人であるとは推定できるが、以下の物語の展開

-
- 3 1901年の処女詩集『習作と前奏曲 (*Études et Préludes*)』発表時、著者名はR. Vivien とイニシャルのみが示されており、以後、1902年発表の小話集『フィヨルドの霧 (*Brumes de fiordes*)』まで、その名「ルネ」は男性形のRenéと表記されている。1903年の詩集『エヴォカシオン (*Évocations*)』発表時に初めてRenée Vivienと「ルネ」を女性形で表記し、以後この名で処女詩集等の再版も行われる。ちなみに「ルネ・ヴィヴィアン」は筆名であり（本名はPauline-Mary Tarn）、華麗な文体で当時の詩壇で話題となったこの詩人の素性が明らかになるのは、親交のあった人々の多くにとっても後年のことであった。
- 4 ダーム通り69番地は、パリ17区に実在する通り番地であり（1904年当時にも同名の通りとして存在していたことは、辞書等によって確認できる。詳しくは、Gustave Pessard, *Nouveau Dictionnaire de Paris*, E. Rey, 1904を参照のこと）。20世紀初頭のこの境界の意味するところについては、さらに調査の必要があるものと思われる。「ダーム (Dames) = 貴婦人方」が、この短篇の表題と呼応し、この語り手の嗜好とも相通じるものがあることも指摘しておきたい。

において、それ以上の意味を持っている訳ではない。「宝石の残酷さ」の付記には、「ジュゼッペ・ピアンキーニによって語られた (*Conté par Gieuseppe Bianchini*)」とあり、これも語り手がイタリア人男性であるらしいことを示しているのみの記述である。「鰐女」もまた、「マイク・ワッツによって語られた (*Conté par Mike Watts*)」とのみあって、語り手がおそらく英国人男性であることが示され、物語中に名乗る場面があるにはあるが、そのことがそれ以上重要な意味を担っている訳ではないように思われる。また、「輝ける娼婦」は「ある嫉妬深い男の話 (*récit d'un envieux*)」と付記があり、また、「うらはらな慎み」には、同じような付記はないものの、「私は三日前からこの町 (=ジェノヴァ) に逗留していて… (*J'étais depuis trois jours l'hôte de la ville [=Gênes]...*)」と、冒頭にすぐ男性であると判別できる一人称が出現することから、いずれもおそらく空疎な固有名を与えられた男性一人称の語る、前述の作品群と同じスタイルの物語を形成しているものといえる。

「森の裏切り」は「ブルー・ダークによって語られた (*Conté par Blue Dirk*)」とあり、この「ブルー・ダーク」は人名ですらなく、スコットランドの高地住民の用いる短剣の一種で、それがこの語り手の仇名であることは、物語の冒頭ですぐ明らかにされる。

Je ne suis pas un méchant homme, quoique l'on ait surnommé : The Forest Devil.
On m'appelle aussi Blue Dirk, parce que je suis tatoué sur tout le corps. (p. 61)

俺は意地悪な男ではないが、人は俺に「森の悪魔」という仇名をつけた。人はまた俺を「ブルー・ダーク」とも呼ぶ。全身に刺青を入れているからだ。

この短篇の男性一人称は、他の物語の男性が少しずつ誇示する、好色で粗暴な男性性とも違ったものを、最も極端な形で標榜する存在であると言える。この書き出しだけを見ても、この男が、他の男性一人称とは大きく異なる存在であると同時に、この物語の読者として期待される人々にとっては全く無縁の、想像上の「男性性の権化」とでもいったものであることは、「全身に刺青を入れている」ことから明らかである。

かくして初めから「男性」であると明確に刻印された語り手は、それぞれに自己を語り、それぞれの女性を語り、その愛の物語を紡いでゆくことになるのであるが、それぞれの女性との関係もまたいくつかの類型に分類される。

まず、見ず知らずの女性と旅のつれづれに知り合って始まるという設定の物語が「雌狼を連れた貴婦人」「宝石の残酷さ」「うらはらな慎み」「輝ける娼婦」「鰐女」の5篇あり、「渴きが嘲笑する…」「森の裏切り」「はしばみのような瞳の女」は、ある時期をともに連れ合いとして過ごした女についての物語という設定になっている。この後者3篇も、いわゆる「妻 (*femme*)」や「愛人 (*maitresse*)」のような存在でありながら、そうではないことが何度も

強調されている。「渇きが嘲笑する…」の「ポリー (Polly)」と名付けられた女性は、「私の旅の道づれ (ma compagne de route) (p. 33)」とされ、ともに草原を驢馬に乗って旅しているし、「森の裏切り」では、「ジョアン (Joan)」と名付けられ「俺」と等しく全身に刺青の入った女性を「俺」は「妻」と呼んでいるものの、「出会った日にそこに牧師がいなかった (là où nous nous sommes rencontrés, il n'y avait pas de clergyman) (p. 61)」ので「英国国教会式では結婚しなかった (Nous nous sommes pas mariés selon l'Eglise anglicane) (p. 61)」ことを冒頭に述べ、正式な妻ではないことを明らかにしている。「はしばみのような髪の女」でも、女は冒頭から「ネル (Nell)」と呼ばれ、「優れた冒険の相棒 (une excellente compagne d'aventures (p. 97))」として、「少年と同じように勇敢で頑健だが、少年よりも賢明な (aussi brave, aussi vigoureuse et plus intelligente qu'un garçon) (p. 95)」この女を語り手は愛しているが、「愛人」になって欲しいという再三の懇願は決して受け入れられることがない⁵。

男性の固有名と同様、女性の固有名も、女性であること、前出のポリー、ジョアン、ネル⁶についてはおそらく英国系の愛称であること以外には何ほどのことも物語ってはいないように思われる。他の短篇の女性も、娼婦である「宝石の残酷さ」と「輝ける娼婦」の女はそれぞれ、「マドンナ・ジェンマ (Madonna Gemma)」, 「栄光 (la Gloire)」という名、または仇名を与えられているが、これも男性の場合と同様、マドンナ・ジェンマがイタリアのありふれた名であること、「栄光」が娼婦にあってもおかしくない源氏名であること以外の情報は伝わっていない。「うらはらな慎み」の女性は娼婦ではなく娼館の元締めではあるが、「ミリアム (Myriam)」という中東系の名⁷で呼ばれるだけで、ここでも固有名がさほど大きな意味を持ってはいないことがわかる。「雌狼を連れた貴婦人」と「鰐女」に至っては、固有名が与えられていないが、「雌狼を連れている」あるいは「鰐に酷似している」という常ならぬ状況によって、固有名を与えられている女性よりもむしろ強烈に、その人物が印象付けられていると言えなくもないだろう⁸。

こうして素描されるこれら男女の物語は、決して長年連れ添った肝胆相照らす伴侶としての女性ではなく、いずれも男性からみると理解不能な、決して心を開くことのない女性像にその

5 これら後者3篇（「渇きが嘲笑する…」「森の裏切り」「はしばみのような瞳の女」）の女性はいずれも、性格的に肉体的にも、女性的であるというよりも、男性的な特徴が際立っている。

6 ネルについては、その瞳と髪の色から、古いスコットランドのパラードを思い出した語り手が「はしばみのような茶色い娘 (The Nut-Brown Maid) (p. 97)」と呼ぶこともある。

7 ミリアム登場の時に語り手が、その美しさを「美しいユダヤの女たちの東方の壮麗さが彼女の中で光り輝いていた (La magnificence orientale des belles Juives éclatait en elle) (p. 72)」としていることから、その出自をうかがい知ることができる。

8 事実「鰐女」では、鰐に酷似した女は男の名を尋ね、男は「マイク・ワッツ」だと答え、女はその名を呼ぶが、自ら名乗ることはない。

共通点を求めることができる。その姿にヴィヴィアン自身の女性像の投影を見ることはおそらく容易かつ妥当なのではあるが、小論ではその具体的な諸相を詳細に検討することによって、かくしてすれ違う男と女のさまざまなありようを辿ってみることに主眼を置きたい。

3. 男性一人称の語り手

それぞれの物語において、男性一人称の語り手は、女とその女との物語について語りながら、自身についてもまた語っている。ここではその諸相を眺めることによって、男たちはまず、どのような立場に自己を据えて女とその女との関係を描こうとしているのかについて検討を加えたい。

3-1. 「雌狼を連れた貴婦人」の語り手

「雌狼を連れた貴婦人」の語り手は、その導入部において、自分自身についてこう述べている。

Et moi (je le dis sans fautilité, mesdames), on a bien voulu quelquefois ne pas me trouver indifférent. Ce n'est pas que je sois extraordinairement doué par la Nature au physique ni au moral : mais enfin, tel que je suis —l'avouerai-je ?—, j'ai été très gâté par le sexe (p. 20).

それに私は（自惚れて言う訳ではないのですよ、ご婦人方）、恬淡としている訳ではないとこれまでもよく言われてきました。それは私が人並み外れた肉体や精神に生来恵まれているからではなく、まあ有体に言ってしまうえば、一思い切って告白してしまうと一なぜかとても女性にもててきたのです。

語り手は恋の鞆あてに長けた百戦錬磨の誘惑者であり、そのような自分がなぜ「美しくも愛らしくも、感じの良い訳でもない (ni belle, ni jolie, ni même agréable) (p. 20)」女に言い寄ろうとしたのか、という自問⁹から、奇妙な女との物語が展開されて行くことになる。この語り手が女性との情事に長けていることは、以下の記述によってさらに強調される。

... J'avais aux lèvres ces paroles aimablement banales qui facilitent les relations entre étrangers. Les mots ne sont rien en pareil cas—l'art de les prononcer est tout. (p. 20)

9 しかしこの自信家の語り手は、この雌狼を連れた貴婦人ただ一人が、「船上にいた唯一の女性だった (c'était la seule femme qui fût à bord) (p. 21)」から、という弁明を忘れずに付け加えている。

言葉の通じない者どうしが仲良くなるのを助けてくれる、かの愛らしくもありふれた言い回しが私の唇からやすやすと漏れました。こんな時には、言葉は何ほどのものでもない。それを口にする技こそがすべてなのです。

以下語り手は、女との出会いの物語と会話の応酬に埋没してゆくが、語りに戻って自己について語る部分でも、自分がいかに恋の熟練者なのであって、このような奇妙な種類の女であっても、その心理状態を自分は冷静に分析しうる立場にあるということを標榜しているかのよう

に自己を語っている。

...je vous dirais que je n'ai pas toujours méprisé les maisons publiques et que j'ai même ramassé maintes fois, sur le trottoir, de piteuses grues. Cela n'empêche pas les Parisiennes d'être plus accommodantes que cette sainte-nitouche. Je ne suis nullement fat, mais enfin il faut avoir la conscience de sa valeur. (p. 25)

私は必ずしも常に娼館を厭うた訳ではなく、また歩道で哀れを誘う街娼を拾ったことも数多あったと申しあげましょう。だからといってパリのお嬢さんたちが、あの体裁屋の女より物わかりがいいことに変わりはありません。私は自惚れている訳では全くありませんが、それでもとどのつまり、あの女の値打ちを理解してやろうという姿勢が必要なのです。

また語り手は、物語の随所で「私は機微に通じていない訳では全くない (je ne manque point de finesse) (p. 23)」と、自分が情事において呑み込みのよい男であることを付け加えることも忘れない。また、この語り手は、自分の外観にも注意を払う繊細さを普段は忘れない気遣いがあり、二人の乗り込んでいた客船が座礁した時、「生涯で初めて、私は身づくろいを忘れた (Pour la première fois de ma vie, je négligeai ma toilette) (p. 25)」と述懐している。

かくして誘惑者は、自らの手練手管に自信を持ち、女性の一見つれない態度の中にも自分への愛情あるいは少なくとも関心が見えたものと自信を深める。

Mais moi qui étudie depuis longtemps la psychologie sur le visage féminin, je compris que ses lourdes paupières baissées cachaient de vacillantes lueurs d'amour. (p. 22)

けれど私は、女の顔にその心模様を見ることを長いこと探究してきたので、かの女性の伏せた重い瞼が、揺れる愛の輝きを隠しているのだと分かりました。

言い寄った女が警戒心をむき出しにして、自分を寄せ付けない態度を見せるときにも、色の

道に長けた先達として、あたかも読者を諭すかのように、語り手はそのような女の遇し方について説教を垂れてみせる。

Il faut avoir beaucoup de patience avec les femmes, n'est-ce pas ? et ne jamais croire un seul mot de ce qu'elles vous disent. Quand elles vous ordonnent de partir, il faut demeurer. En vérité, messieurs, j'ai quelque honte à vous resservir des banalités aussi piètres. (p. 22)

女たちに対しては、多くの忍耐が必要なのです。そうではありませんか？そして女の言う言葉など一言も信じてはなりません。出て行けと言われたら、踏みとどまらなければならないのです。本当のところ、紳士諸君、私はこれほどまでにありふれた、取るに足らないことどもを繰り返すのには幾分の恥じらいを禁じ得ないのです。

この主人公はしかし、何も物を知らない若造の読者に語りかけているのではなく、自分と同等の、恋の鞘当てにも長けた紳士連に語りかけているのであって、自分の判断が独りよがりなものではなく、男性なら皆同じように考え、行動するものではなからうかと聞き手すなわち読者に問いかけている。

Les longues résistances vous font quelquefois l'effet d'une agréable surprise, et rendent la victoire plus éclatante... Vous ne me contredirez pas sur ce point, n'est-ce pas, messieurs ? (p. 21)

長いこと拒まれるとそれが、心地よい驚きの効果をもたらし、勝利をより輝かしいものにしてくれることがあるでしょう…。この点についてはあなた方も私に反論はないでしょう。そうではありませんか？紳士諸君。

この語り手はまた、その遣い手がヴィヴィアンという女性であることをことさらに隠すかのように、さらに自分が男性であることを強調し、男性読者の共感を得ようとするような素振りを見せながら、また同時に男だけの世界からは距離を置きたがっているような様子も垣間見える。

Nous avons tous à peu près les mêmes sentiments. Il y a entre nous une fraternité d'âme si complète qu'elle rend une conversation presque impossible. C'est pourquoi je fuis souvent la monotone compagnie des hommes, trop identiques à moi-même. (p. 21)

私たちは皆ほとんど同じ感情を持っているのです。私たちの間にはあまりにも完全な魂

の親しさがあるので、会話というものはほとんど不可能になるのです。それで私は、私とあまりにも似ている男どうしの単調な仲間からしばしば逃げ出すのです。

また、乗り込んでいた船が座礁し、男たちが慌てふためいて救命ボートに乗りこもうとするさまを見て、語り手は、なぜかそんな非常時に、「女に言い寄る男は皆、雌犬を嗅ぎ回る雄犬みたいなもの (... pareils aux chiens qui flairent des chiennes) (p.23)」と断じる女の言った「(女を抱いて愛撫する男よりも) ゴリラを目のあたりにする方がずっとおぞましくないでしょう (Le spectacle d'un gorille n'aurait pas été plus repoussant) (p. 26)」という言葉の思い出して失笑してしまったと付け加えることで、そのような獣性をむき出しにした、「毛むくじゃらの手足の、もじゃもじゃの胸毛をした (ces bras et ces jambes poilus et ces poitrines hirsutes) (p. 25)」男たちと、自分が一線を画す存在であることを示すことも忘れてはいない。

それでも笑っていたのはほんの一瞬で、雌狼を連れた貴婦人が、今までにないほど冷静で落ち着き払っているのとは対照的に、死の恐怖を身近に感じた語り手は、身の内の骸骨が戦慄するのを感じて涙を流し、自分の死というよりはむしろその骸を思い浮かべ、さらに戦慄する。

Je serais une chaire bleue et noire, plus gonflée qu'une outre rebondie. Les requins happeraient par-ci, par-là, un de mes membres disjoints. Et lorsque je descendais au fond des flots, des crabes grimperaient obliquement le long de ma pourriture et s'en repaîtraient avec gloutonnerie... (p. 26)

私は満杯に詰め込まれた革袋よりももっと膨らんだ、青黒い肉塊となるだろう。私の外れた手足のひとつに、鮫どもがあちこち食らいつくかも知れない。波間深く私が沈んで行くころには、腐敗した私の骸の上を蟹どもが斜めに跳ね歩き、がつがつとそれを食らうだろう。

しかしながらこの語り手は、この命の瀬戸際にあって、越し方の罪を悔い、贖罪の祈りの言葉を拾い集めようと思いを巡らせているうちに、なぜか抗いがたく「発情の本能 (l'instinct du rut) (p. 27)」が湧き上がったことも告白している。

Et des pensées libidineuses vinrent me tourmenter, pareilles à de rouges diabolins. Je revis les lits souillés des compagnes de hasard. J'entendis de nouveau leurs appels stupidement obscènes. J'évoquai les étreintes sans amour. (p. 27)

そしてみだらな考えが、赤い小鬼どものように私を襲ったのです。私には行きずりの女

どもの汚れた寝床が再び見え、馬鹿げたほどに猥褻なそんな女どもの声がまた聞こえてきました。私は愛のない抱擁を思い出したのです。

しかしそれは、壊滅というものに対峙した自己の、「獐猛な抗議 (protestation féroce) (p. 27)」なのだと語り手はすぐに弁明している。このような狂気じみた本能の発露にしても、語り手は自分だけが特別にそのような感情を抱いたのではなく、それは誰にも等しく有りうることではないかと読者の共感を得ようとする。

Moi un très honnête garçon, en somme, estimé de tout le monde, excepté de quelques jaloux, aimé même de quelques-uns, me reprocher aussi amèrement une existence qui ne fut ni pire ni meilleure que celle de tout le monde !... Je dus avoir une passagère folie. Nous étions tous un peu fous, du reste... (p. 27)

私は結局のところ、誰からも誠実な人物だと思われてきました。もちろん妬まれたり愛されたりしたことはどちらもありますし、それでも厳しめに反省してみても、他の皆と比べてそれまで良くも悪くもなかったと思うのです。その時は一過性の狂気に取りつかれたのでしょう。私たちは皆つまるところ、少しばかり狂人と化していたのです。

この語り手は、結局難破しようとしている船からこの女を助けることができず、見殺しにすることになるが、それは自分の罪ではなく、女があまりにも無礼だったからだと言い直り、読者にもそう思うだろうと共感を求めている¹⁰。

Quant à moi, je ne pouvais véritablement pas m'embarrasser d'une semblable péronnelle. Et puis elle avait été si insolente à mon égard ! Vous comprenez cela, n'est-ce pas, messieurs ? Vous n'auriez pas agi autrement que moi. (p. 28)

私はと言えば、あんな性悪女を抱え込むことはやはりできませんでした。それに、彼女は私に対してあれほどまでに無礼だったのです。それはお分かりになって頂けますよね。紳士諸君。あなた方だって私と別様には振る舞えなかったことでしょう。

10 先に救命ボートに乗り込んだ語り手が手を差し伸べたとき、女はそれに応えて乗り込もうとしたが、雌狼を連れていることを見とがめられ、救助作業を指揮していた中尉に「動物は連れて行けない」と言われて、沈む船に踏みとどまることになる。特に語り手に対して「性悪」だった訳でも「無礼」だった訳でもないことに注意しておきたい。

また、その後自らは救われ、夜が明けてからも、他の者がどうなったか目を向ける勇気は保っていて、女が折れたマストの上で漂流し続けているさまを目の当たりにして、語り手はさらに自己弁護を続ける。

Je eus la certitude que, si les forces et l'endurance de cette femme ne trahissaient point, elle pourrait être sauvée. Je le souhaitai de tout mon cœur... (p. 29)

もし体力と気力が彼女を裏切らないならば、彼女は助かるだろうと私は確信しました。そしてそうなるように心から願ったのです。

このように語り手は自己弁護を繰り返しつつ、それ以来船旅に懲りてこれまで行わなかったのに、この語りの場面が実は、船の難破した場所に戻って来るための船内であることが、物語のほとんど終末部分で明らかにされる。この語りの中で幾度となく繰り返された「ご婦人方 (Mesdames)」 「紳士諸君 (Messieurs)」 という呼びかけは、旅の無聊をかこつ船客であり、この語り手が何故この地に戻る気になったのかについては、最後まで明かされることはない。それはただ、語り手に語る場面を提供するための装置だったともいえるが、そこにはいくらかの、女を悼む気持ちが示されていると言えるのだろうか。

3-2. 「渇きが嘲笑する…」の語り手

この物語の語り手は、「雌狼を連れた貴婦人」のそれとは異なり、自らについて語る部分はほとんどない。ごく僅かに「たしかに自分には教養がある (J'ai reçu de l'instruction, c'est vrai) (p. 32)」と述べてはいるが、それも「草原では教養など何の役に立つのか (à quoi sert l'instruction dans les prairies ?) (p. 32)」とそれを打ち消すため、読者の共感を得るための自己弁護めいたことは一切口にしない。それどころか、この語り手が幾度となく口にするのは、この道連れを女を、自分はいつか殺してしまうだろうという確信である。

Je finirai sûrement par la tuer un jour. Je n'aurai jamais la force de l'étrangler ; mais je lui tirerai dans le dos un bon coup de revolver. (p. 34)

確かに私はいつか、この女を殺してしまうだろう。この女を扼殺する力を得ることは決してないだろうが、背中にレボルバーの一撃をしかと見舞ってやろう。

なぜか自分の問いかけに頑なに口を閉ざし、自分が動揺している時でも一向に動じる素振りを見せない女に対して、語り手は愛情よりも憎しみを抱いていると述べる。その憎しみの依って来るところはとどのつまり、この女が自分より強く雄々しいからだと言え、ただ単に自分が

この女に打ち勝ったのだという喜びを得るために、いつの日か女を殺したいと語り手は繰り返し述べる。

Je la hais férocelement, parce qu'elle est plus forte et plus vaillante que moi... Je la hais, comme une femme exècre l'homme qui la domine. Je finirai certes par la tuer un jour, pour le plaisir de la vaincre, tout simplement. (p. 36)

私はこの女を憎んでいる。というのもこの女は私より強く、凛々しいから。私はこの女を憎んでいる。女を支配している男を嫌がっているから。私は必ずやいつか、この女を殺してしまうだろう。ただ単に、この女に打ち勝ったという喜びを得るために。

語り手がこの女を殺したい動機は、とどのつまり女が自分よりも男性的だからであり、それが「自分の漠とした精神的優越感 (une vague supériorité mentale) (p. 32)」を踏みにじることがままあるためである。女なら普通は喜ぶような心づかいの言葉も、ポリーはそれを「無用な言葉 (les mots inutiles) (p. 32)」として好まない。女が感情らしきものを見せ、満足した様子になるのは、夕刻に軽くブランデーをあおる時だけなのである。このような女を、「草原に生きる男にはぜひとも必要な道連れ (la compagne qu'il faut à un homme de la prairie) (p. 34)」と認めながらも、語り手はその心身の堅固さ、頑なさをひそかに憎んでいる。

物語では、草原に一面に野火が広がり、語り手は「死は恐れない (je ne crains pas la mort) (p. 35)」と言いながら、生きて焼かれる光景を思い浮かべて、拷問にかけられたような苦痛を覚えている自分とは対照的に、女が決して動じていない様子を見、煙に酔って気を失い、野火が収まって焼け野原となった二時間後に目覚め、女がほんの一秒も恐怖を抱いていなかった様子であることにさらに憎しみを覚える。語り手は、神をも恐れぬこの女が「自分が女を殺す日にもおそらくそれ以上の恐怖は抱かないだろう (Elle n'aura pas peur d'avantage le jour où je la tuerai) (p. 37)」と確信しながらも、殺したいという決意を新たにする。そんな語り手に対して女が見下げたように最後に吐く「あんたはなんて卑怯なの (Comme tu es lâche !) (p. 37)」という台詞は、この短い物語の一人称の語り手のささやかな自尊心を打ち砕くのに十分な破壊力をはらんでいる。男性の語りによって物語を展開させておきながら、しまいにはその男性が操り人形に過ぎないことが明らかになっている場面であると言えるのではないだろうか。

3-3. 「宝石の残酷さ」の語り手

「宝石の残酷さ」の語り手は、他の語り手とは異なり、基本的に今日の前にいる「マドンナ・ジェンマ」という女性を「貴女 (vous)」として語りかける。この女性がおそらく娼婦あるいはこ

の語り手の愛人であるのは、語りの端々から伺うことができるが、決して心のすべてを開いてこの語り手を受け入れている訳ではないということもわかる。語り手は、このマドンナの歓心を買うために、あらゆる宝石と金を思うがままに支配しようと錬金術を始める。語りの丁寧さからも日々部屋にこもって錬金術に没頭する様子からも、禁欲的な紳士を思い浮かべることは容易ではあるが、語り手は自分の行動については恐ろしく饒舌に語るものの、自らの容姿や外見、考えについてつまびらかにすることは決してない。やがてこの語り手は、黒魔術を行なっているとの告発を受けて投獄されるが、このマドンナに会うため、脱獄を企てることになる。

Et afin de vous rejoindre—ne tremblez point ainsi, ma Maîtresse éblouissante—afin de vous retrouver et de vous torturer savamment avec d'infinies caresses de cruauté, je voulus m'échapper de ma geôle ténébreuse. (p. 51)

そしてあなたに会うために—そんな風に震えなくていいのですよ、まばゆいばかりの我が愛人よ—あなたに会って、狂おしいほどの際限のない愛撫で貴女を責め苛むために、私はあの暗黒の牢獄から逃れたいと思ったのです。

語り手は看守を撲殺し、その外套を奪って逃亡を企てる。語りの穏やかさとは対照的な野蛮な暴挙であり、その後酒に酔った看守の妻を誘惑する行為とともに、マドンナの歓心を買うためとはいえ、読者には違和感を抱かせる語り口であるといえる。その語り口の丁寧さと、この語り手の男が本質的に持っている獣性の不整合こそが、この物語の語りの特異性を形作っているように思われる。看守の妻を犯すのはその「粗暴な媚態 (la coquetterie grossière) (p. 52)」に惹かれたからであり、それは「錯乱した自分の脳裏にあふれ出た、本能のようなとっさの思い (Un plan, irréflecti à l'égal d'un instinct) (p. 53)」からだと弁明している。他の物語でも、このような本能めいたものに駆られて発情したり、実際に女を犯したりする語り手は存在するが、この物語の語り手の特性は、「巨大な百姓女 (énorme paysanne) (p. 53)」とこの女を呼びながら、「何も恐れることはないのですよ。おお、赤毛の美しい女^{ひと}よ。秋の夕日の生まれ変わりのような！ Ne craignez rien, ô beauté rousse, incarnation d'un couchant d'automne ! (p. 53)」などと、淑女に呼び掛けるような愛の言葉を浴びせかける点にある。泥酔し、決して美しいとも洗練されているとも言えないような中年女に、なぜこれほどの賛辞を浴びせるのか、読者は当惑を禁じ得ないだろう。たとえばこの語り手は、女の心を解きほぐすために、およそこの女には似つかわしくない美辞を並べ立てる。

--- Lorsque l'aurore s'ouvrit ainsi qu'une rose, j'étais encore sous votre fenêtre, Madonna. Je composais en votre honneur des litanies ferventes, comme à la *santissia*

Vergine... Vous êtes la flamme de Venise, le mirage du couchant, le sourire des flots ternis... (p. 54)

曙が薔薇のように開くとき、私はまだ貴女の窓の下にいたのです。マドンナ。そして貴女を思っ、この上なく清い聖母にささげるのに等しい熱い連祷の詩を作ったのです。貴女はヴェツィアの炎、夕日の蜃気楼、にび色の波の微笑みです…。

もちろんこれは、語り手が、かくして逃亡ののち、この快挙に陶然として愛人となったマドンナ・ジェンマに向かって語る物語の中で述懐していることなのであって、すべては架空の物語である可能性も高い。また、マドンナ・ジェンマの想像力や嫉妬心を掻き立てるために、常ならぬ欲情のさまと、「農婦のような女」には似つかわしくないような美辞麗句をここで響かせているのかもしれない。

こうしてマドンナ・ジェンマのもとに馳せ参じた語り手は、いまやその寵を得、自分は愛されていると断じている。優位に立ったと思い込んだ素振りを見せる語り手は、物語の終わりに、脅迫めいた言辞を弄してマドンナ・ジェンマに釘を刺している。

Et, parce que vous me craignez, vous m'aimez. Vous m'ignorez pas que je vous briserai plus tard, au gré de mon caprice. Vous n'ignorai pas que je vous détruirai, lorsque vous aurez cessé de me plaire. Silencieuse d'horreur passive, vous épiez mes gestes et mes pas... Vous attendez la Fin. Mais le moment n'est pas point encore venu, car votre corps me tente comme l'eau parfumée des pastèques et des figues.(p.60)

貴女は私を恐れているからこそ愛している。いつか私が気まぐれに貴女を殺めることがあることもお忘れでないように。何かされるかもしれないと恐れて黙ってはいるが、貴女は私の振る舞いや足取りを窺っていますね。貴女は最期の時を待っているのですね。けれどまだその時は訪れていません。というのも貴女の身体が、西瓜や無花果の香りのついた水のように私をそそるからです。

最後に語り手はさらに増長し、「私はお前の唇がほしい (Je veux tes lèvres... (p. 60))」と、それまでの丁寧な調子を改め、執拗に接吻を求める「口づけを、口づけを、口づけを (Des baisers, des baisers, des baisers...) (P. 60)」という呼びかけで物語は閉じられる。ここで確認しておかなければならないのは、マドンナ・ジェンマと呼ばれている女性は、終始一言も発していないということで、すべては語り手の勝手な想像と解釈に基づいた言辞だということが分かる。最後に「お前」と迫ってくるこの語り手の滑稽さは、マドンナ・ジェンマになり代わった読者の苦笑を、おのずから誘っているかのようでもある。

3-4. 「森の裏切り」の語り手

この語り手は、他の男性一人称の語り手とは異なり、9頁強の短い物語の中で、冒頭2頁を割いて自らについて実に饒舌に語る。語り手はここで、酩酊状態で幾人かを死に至らしめた過去を、酒に責任転嫁しながら無反省に語っている。それは前述のように、この人物がおおよそ想像を絶する常ならぬ凶暴な人物であることを物語っている点でも、他の物語の男性一人称の語り手とは大きく異なることを示している。男は、「ひどく飢えていたのでなければ、そんな風に突き動かされることはなかった（je ne serais pas conduit de cette façon si je n'avais été terriblement à jeun）（p. 62）」と言いながら、丸一ヶ月も女日照りだったときに幼い娘を力づくで犯したことを告白し、金をどこに隠しているか教えなかったからと言って老いた農婦の足を焼き、金を出したのでそれ以上悪さはしなかったと付け加えたうえで、「そんなことはすべて大して重要なことでもない（En somme, tout cela n'a point beaucoup d'importance）（p. 62）」にもかかわらず、それでもなぜ「人が自分を『森の悪魔』と呼ぶのかわからない（je ne sais pas pourquoi on m'appelle The Forest Devil）（p. 62）」とうそぶいている。この男はまた、自己の殺人行為を正当化しながら、死についてこう語っている。

Qu'est-ce que le meurtre, au total ? Une avance de quelques années sur la fin inévitable. Un supplice de vingt minutes est-il donc si terrible ? N'est-il point mille fois moins hideux que les longues années d'agonie ?... Un cancer, par exemple... Pour moi, j'aimerais mieux être assassiné que de mourir d'un cancer. (p. 62)

とどのつまり殺人とは何か。それは避けがたい結末を何年か先取りすることだ。二十分間の責め苦は、つまりそれほど酷いものなのだろうか。長年にわたる苦悶の方が、それより千倍も忌まわしいのではないか？…たとえば癌…。俺なら癌で死ぬよりも、殺されて死にたいものだ。

読者の共感を敢えて退けているかのようにも思えるこの語り手は、幼い娘を凌辱したことについては、自分がしなければ他の男がしたまでのことで、遅かれ早かれ男の凶暴さを知ることになるのだからと自らの行為を正当化している。

je n'ai fait que prévenir la violence naturelle qu'un autre mâle eût, selon toute probabilité, exercé sur sa personne. Je n'ai jamais possédé de vierge pubère, mais on m'affirme que l'initiation est toujours très douloureuse pour une femme. (p. 63)

俺は、恐らくは必ずや他の男が、振るったであろう生まれもった暴力をあの子に見舞ってやっただけのことだ。俺は年頃の娘のことは全く知らないが、女にとって初めはいつだっ

てひどく痛いって誰もが言うのだから。

この語り手は、その語るところによれば、人並み外れて凶暴な人物のように思えるが、その反面洞察力に優れ、生活知とでもいった常識があることを読者にそれとなく伝えている。

Il est vrai qu'il y a un très grand nombre de femmes qui meurent vierges. Malgré cela, j'ai entendu dire que ce n'est point là le destin normal de la femme. Il paraît même que c'est presque immoral. Les gens qui m'ont dit cela ont ce qu'on appelle des « idées saines ». Avoir des idées saines, c'est penser comme tout le monde. (p. 63)

処女のまま死ぬ女も実に沢山いるというのは本当だ。とはいえ俺は、それが女の普通の運命ではちっともないとも聞いている。どうやらそれは、ほとんど非道德的なことであるらしい。俺にそう言ってくれた奴らは、「健全な考え」と呼ばれるものを持ち合わせた奴らだ。健全な考えというのは、誰もと同じように考えるということだ。

金のありかを言わなかったので足を焼いた老農婦についても、その吝嗇さにあきれた様子を示したうえで、「たぶん天国に行くのを助けてやったのだ (J'ai peut-être facilité son entrée dans le royaume des cieux.) (p. 63)」と、自分に都合のよい解釈を行なっている。また、自分のことを、その性根は「すぐれていい奴 (un excellent drille) (p. 62)」だといい、村人に大金を積まれたのでつがいの虎を退治しに行くときも、金よりもまず「隣人愛 (l'amour du prochain) (p. 63)」こそがその動機なのだと読者に胸を張ってみせる。

しかしながらこの語り手は、伴侶であったジョアンに対しては、そのような凶暴さを示すことは決してない。それはジョアンが、女性であるというよりは「驚嘆すべき狩の相棒 (une admirable compagne de chasse) (p. 64)」であり、そのために「この女を自分のもとに長らく引き留めてきた (je l'ai gardée si longtemps) (p. 64)」からである。狩の相棒として獲物の仕留め方を打ち合わせているときには、語り手にとってジョアンは最高の伴侶であり、その死をも恐れない態度も好ましいものとして映る。ジョアンの語る望ましい死は、語り手が先に語った死と似通っている。

Puisqu'il faut disparaître de toute façon, autant s'en aller en plein air, jeune et fort, que de pourrir peu à peu dans une chambre de malade où l'on étouffe et qui sent mauvais. (p. 66)

所詮いつかは死ななければならぬのなら、若くて強いうちに、青空の下で死んだ方がましだわ。息の詰まるような臭い病室で少しずつ腐って行くよりはね。

一見するとこの女性は、「渴きが嘲笑する…」のポリーと似通っているような印象を受けるが、決定的に異なる点があって、それは、ポリーが命の危機の瀬戸際にあっても決してものに動じず、また常に言葉少なだったのに対し、ジョアンは虎を仕留め、つがいの雌がやって来るのを待っている間に、語り手に何度制されても話をやめず、それまでついぞ表わさなかった感情まで露わにすることである。森は静寂に包まれ、その美しさにジョアンは驚嘆する。語り手が描写しているはずの森は、粗暴で無教養な男が描いているとはとても思えないほど美しい比喩に満ち、あたかもこの箇所だけは、語りの審級が作者の高みに引き上げられているかのようである。

Les branches des arbres semblaient des pythons immobiles. Les lianes s'enroulaient comme des serpents verts. Un souffle de péril et de trahison montait de la terre et tombait des feuillages. Les étoiles étaient grandes ouvertes, ainsi que des fleurs de flamme. (p. 67)

木々の枝はじつとした大蛇のようだった。緑の蛇のように蔦が這い回っていた。大地から危機と裏切りの吐息の風が立ち上って、木々の葉を落としていた。星は炎の花のように大きく開いていた。

ジョアンは、その光景に驚嘆して「なんて綺麗なんでしょう、このすべてが (Comme c'est beau, tout cela !) (p. 67)」と声を上げる。女のそんな様子を目の当たりにした語り手は当惑する。それまでのジョアンは、そのような感情を抱くことを「弱さのしるし (signes de la faiblesse) (p. 67)」とみなしていたはずだからである。ジョアンは語り手の当惑に気づかぬまま、饒舌に語り出し、「死の向こうには何かがあるのかしら (est-ce qu'il y a quelque chose au-delà de la mort ?) (p. 67)」と語り手が答えに窮するような質問を投げかける。語り手が「そんなこと俺に分かるものか (Est-ce que je sais, moi ?)」と返答を拒むと、「分かる訳ないわよね、あんたには。あんたは物知りじゃないから (Naturellement, tu ne le sais pas. Tu n'es pas intelligent,) (p. 68)」と答えて語り手と距離を置こうとしている。ジョアンはまた、15年間も一緒に狩りをして暮らし、枕を並べて眠って来たので、「魂が似通ってきたのと同じように顔も似通ってきた (Nous avons fini par nous ressembler de visage, comme nous nous ressemblons d'âme) (p. 68)」と述懐している。それは語り手も認めるところではあるが、ジョアンはそれでも、自分はあまりにも「男」に似ているために、狩りの相棒としては適していても、女としては良くはなかったと告白することで、語り手と距離を置こうとしているようにも思われる。しかし、「渴きが嘲笑する…」の語り手とは裏腹に、この物語の語り手は、自分を拒んでように思える女を憎む様子は見えず、また、劣等感を刺激されたからといって、前半で標榜

していたような暴力を女に振るうことは絶えてない。「お前は煩わしくて馬鹿げている (Tu es ennuyeuse et stupide) (p. 68)」と言いながら、「まるでこれから死ぬような風にお前は話すんだな (Tu parles comme si tu allais mourir) (p. 68)」と予言めいたことを口にする。確かに、かみ合わない会話の途切れた夜を明かした後、ジョアンはたけり狂った雌虎の餌食となる。語り手は、「すぐれた狩の相棒だったから (car c'était une excellente compagne de chasse) (p. 70)」と前置きしながらも、その死を静かに悼んでいる。この物語においても、語られる内容の激しさと語りの穏やかさとは、鮮やかな対照をなしていると言えるのではないだろうか。

3-5. 「うらはらな憤み」の語り手

「雌狼を連れた貴婦人」や「宝石の残酷さ」に見られるような誘惑者としての男性一人称の語り手の自己規定は、この物語においても確認できる。たまたま三日前からジェノヴァに逗留していた語り手は、一時の快楽を求めて伝手を頼って娼館を訪れるが、自らをそこに至らしめた理由をこう述べている。

...et le voyage, difficile et lent, n'avait diminué en rien ma vigueur et mon courage. Vous me comprenez à demi-mot. « L'homme n'est qu'un chien un rut », a dit un sage... Enfin, la solitude nocturne m'énervait considérablement. Je résolus de choisir une maîtresse d'une heure. (p.71)

…そして長く困難な旅は、しかしだからといって私の精力や勇気を少しも挫くことはなかった。みなまで言わずともお分かりだろう。「男はさかりのついた犬に過ぎない」とある賢者は言ったものだ。夜の孤独に私はひどく苛立ち、ひと時の愛人を選ぶことにした。

この語り手は、自らについてはほとんど何も語らない。唯一素性がうかがえるのは、それまでに見たこともないほど美しい娼館の主であるミリアムに陶然となった語り手が、自分の指から「とても珍しく、傷を負った女の血のように美しいルビー (un rubis très rare, beau comme le sang d'une blessée) (p. 74)」を引き抜き、「ずっしりと重い巾着 (ma bourse pesante) (p. 74)」とともにテーブルの上に投げ出すと、それにミリアムが「私は商人なのであって、商品ではありません (Je suis la marchande, je ne suis point la marchandise) (p. 74)」と答え、冷たく拒絶される場面であり、相当に裕福でまた強引な性格でもあることが見て取れる。動じないミリアムに対して、語り手はそれでも自分をそその媚態がそこにはあると嘲り、自分の思いを遂げるためさらに金で心を動かそうとする。

Mais vous me plaisez. Tout l'or que vous me demanderez, je le verserai dans le creux

de vos mains. (p. 75)

それでも貴女は私の気に入りのだ。貴女の望む限りの金を、私は貴女の両手のくぼみに注いで差し上げよう。

それでも「私は他の女は売っても、私自身は売れません (Je vends des autres, mais je ne me vends point) (p. 74)」と拒み続けるミリアムの冷たい唇を、語り手は「私がお前を愛しているのだから、お前も私を愛しなさい (Aime-moi, car je t'aime) (p. 75)」¹¹と力づくで奪う。ミリアムはそんな語り手をあらん限りの力で押し戻し、出て行くように命じるが、「雄としての虚栄心 (la vanité du mâle) (p. 76)」の訴えを身のうちに聞いた語り手は、「自分の欲望にこの女を従わせようと (forcer cette femme à subir mon vouloir) (p. 76)」怯むことなくさらに挑みかかる。

Je m'approchai d'elle, les sens exaspérés jusqu'au viol. Ma main chercha les seins farouches que soulevait impétueusement un souffle irrité. (p. 76)

ほとんど強姦と言ってもよいほどに五感が昂ぶり、私は彼女に近づいた。私の手は、いら立った息遣いで激しく盛り上がった猛々しい乳房を探した。

その瞬間語り手は女に短剣で胸を突かれる。名医によってかろうじて死を免れ、「自らの力強い若さの奇跡によって (par un miracle de ma vigoureuse jeunesse) (p. 76)」回復した後は、決してあの娼館の敷居をまたぐことはないと言い、ミリアムのことを、厚かましくも、「あの奇妙な、よこしまで純粹、ふしだらで難攻不落の女 (cette étrange femme, perverse et pure, impudique et inaccessible) (p. 76)」と評している。自らの暴挙や独断に対して無反省なのは、これらの男性一人称の語り手に等しく付与された性格であると言えるのではないだろうか。

3-6. 「輝ける娼婦」の語り手

ここでは、語り手はすでに「栄光」の名を知っていて、その登場から物語が始まる。気まぐれな「栄光」が現れたことに語り手はしばし驚くが、それでもやはり「栄光」はしょせん女なのだとこれもまた一方的な評価を下す。

Mais la Gloire est femme, c'est-à dire cruelle et perverse, et elle aime à faire miroiter,

11 「宝石の残酷さ」の語り手同様、接吻を強いるこの語り手は、ここで丁寧な語り口をかなぐり捨て、「お前」と相手との距離を勝手に縮めていることにも注意が必要である。

devant ceux qu'elle dédaigne, les paillettes de sa jupe constellée. (p. 77)

しかし「栄光」は女なのだ。つまり残酷でよこしな。そして彼女は、自分が軽蔑する男どもの前で、スカート散りばめられたスパンコールをちかちかと煌めかせるのが好きなのだ。

このように「栄光」の性質を断じた語り手は、「自尊心と軽侮の念をすっかり (tout mon orgueil et de tout mon dédain)」取り戻して、愛情を持たずに女を眺め、あらん限りの悪罵を浴びせかける。

Tu es la maîtresse saoule des voleurs et des saltimbanques. L'odeur des abattoirs te plaît, et tu aspires avec volupté la fumée préciseuse du sang. Tu es aveugle comme ceux qui font métier de juger leur prochain. Tu es stupide comme les guerriers et tu es vénale comme les mérétrices. Tu t'abandonnes de préférence à ceux qui te violent, (p. 78)

お前は泥棒や軽業師のための酔いどれ愛人さ。屠殺場の匂いがお気に入り、この上なく貴重な血煙りを、貪るように吸いたがる。お前は隣の奴を値踏みするような仕事の奴らと同じく盲目だ。お前は戦士のように愚かで、売春婦のように金づくた。お前は強姦するような奴らに好んで身を任せるんだからな。

このように罵倒し、「これほど醜い娼婦 (une aussi laide putain) (p. 78)」を自分の床に招く気はないと言いながら、語り手がこの娼婦の馴染み客であることは、互いに「お前／あんた (tu)」と呼び合っていることから分かる。「栄光」は語り手のことを「子供のように嘘をついている (Tu mens à l'égal d'un enfant) (p. 78)」と論し、「あんたに身を委ねるつもりはこれっぽっちもない (Je n'ai pas la plus légère intention de me livrer à toi) (p. 78)」と撥ねつける。以下物語は語り手と「栄光」の反論の応酬になり、筋の展開はないまま結局は「栄光」に出て行くように命じるところで結末を迎える。語り手は娼婦という職業を蔑むために悪罵の限りを尽くしているかのようで、「お前は人前でほめるすべての人間を陰で貶めている (C'est toi qui déshonores en secret tous ceux que tu exaltes en public) (p. 78)」ので「隠された過ちを告発するか卑怯な告発女というよりも、中傷女だ (la Calomniatrice plus encore que la lâche Dénonciatrice des fautes cachées) (p. 78)」などと、いわれない言いがかりをつける。女は冷静な調子でそれに反論を試みるが、語り手がそれを聞き入れることはない。「その寛大な優しさであんたを泣かせた女の人があんたの傍らにいたのを見た (j'ai vu à tes côtés une femme dont l'indulgente douceur te faisait pleurer d'amour) (p. 78)」と言われても、

「私の人生や私の思いはお前に何の関係があるのだ (que t'importent ma vie et mes pensées) (p. 79)」と言い放ち、さらに女に罵声を浴びせ続ける。語り手によれば「栄光」は、「肉屋や道で大声を出す物売りどもの打ち据えられた召使女 (la servante battue des bouchers et des hurleurs d'estrade) (p. 79)」であり、「大理石に王侯貴族の取るに足らない名前を刻むくせに、よき詩人の知られていない名前は軽蔑している (graves dans le marbre les noms insignifiants des rois et dédaignes le nom obscur des bons poètes) (p. 79)」のであり、「ブルジョワの寵児であるユゴーをランボーやシャルル・クロよりも高みにおく (places Hugo, le prince des bourgeois, plus haut que Rimbaud et que Charles Cros) (p. 79)」のだとしている。挙句の果ては「イオニアの女ミルティスや女主人公テレシラ、そしてとりわけ旋律豊かで処女に似つかわしいテロスのエランナの聖なる歌¹²を朽ちるがままにした (laissas périr les chants sacrés de Myrtis l'Ionienne, de Télésilla l'héroïne, et surtout de la mélodieuse et virginale Éranne) (p. 79)」と非難している。ここで注意しておくべきことは、語り手が娼婦を罵倒しているうちに、その内容が少しずつずれてきていることで、詩人に言及しているあたりからは発話者はもとの男性一人称の語り手ではなく、ヴィヴィアン自身が己が世人に理解されないことを嘆いているかのような印象を与えて興味深い、物語の展開はここで破綻している。

3-7. 「鰐女」の語り手

この語り手もまた、自らの心身の強靱さを強調するところから語りを始める。他の男なら発狂してもおかしくないような境遇で、自分は常に正気を保ってきたのだという。

J'ai vu des gens hurler et gesticuler comme des démons après les longues journées de marche dans le désert. Le soleil, martelant leurs cervelles d'imbéciles, leurs avait donné des idées étranges. Mais moi, j'ai toujours été tranquille et raisonnable. (p. 81)

私は砂漠を歩く長い一日が続いた後で、小鬼のように叫びを上げ、身を屈める男たちを見たことがある。太陽は、その愚かな脳みそを打ちのめし、奴らに奇妙な考えを植え付けたのだ。それでも私は、常に冷静で分別を保っていたのである。

語り手は、車軸の雨の降りしきる川のほとりで、鰐に酷似した女に出会う。普通の人間なら

12 ここで名を挙げられている、ミルティス、テレシラ、エランナは、サッフォーと同じ古代ギリシアの女性詩人たちで、その作品の仏訳とされるものは『雌狼を連れた女』と同年に発表された『レ・キタレーデース』に収められている。

気の狂いそうな状況ではあるが、「自分はすっかり正気を保っている (J'ai toute ma raison) (p. 82)」と何度も繰り返しながら、怯むことなく女と会話の応酬をする。女は鰐の背中のようにごつごつとした肌をしていて、鰐を仲間だとしてそれぞれに名で呼ぶのだと言う。語り手はさすがに戦慄を覚えるが、女はクロコダイルの王と女王が自分の友だと言い、さらに不思議な話を続ける。

Le roi demeure à Denderah. La reine, qui est aussi puissante et plus cruelle encore que lui, a préféré s'en aller quarante lieues plus haut, afin de régner seule. Elle veut la puissance sans partage. Lui aussi aime l'indépendance ; ce qui fait que, tout en restant très bons amis, ils vivent séparés. Ils ne se rejoignent qu'à de rares intervalles, pour l'acte d'amour. » (p. 83)

王はデンデラに住み、女王は同じくらい強力でもっと残忍なので、一人で統治するために王よりも四十里ほど高いところに行ったの。女王は権力を一人占めしたいのよ。王もまた独立を愛しているの。だからお互いによい友でありながら、離れて暮らしているという訳。ごく稀に交尾するときしか、二匹が会うことはないわ。

語り手はこう話している鰐女の瞳の奥に、「好色な獐猛さの光 (une lueur de férocité libidineuse) (p. 83)」が宿っているのを認め、戦慄する。女は語り手ににじり寄りながら話を続け、名を尋ねる。女が笑うと鰐のそれと等しい鋭い歯が見え、語り手はまた戦慄を覚える。それでもまだ自分を信じないのかと詰め寄る女は鰐どもを呼び寄せ、その一匹に跨って見せるが、語り手は震えながら平静を保って見せる。女に命じられて後をついてゆく語り手は、やがて「女が自分を欲している (elle voulait de moi...) (p. 85)」のをみてとる。そして何とかして女を殺さなければならぬと機会をうかがい、もっとも弱い部分である目を狙えばよいことに気づいて、「ついに陸に戻った遭難者か、幻覚に悩まされたおぞましい夜を曙が消し去ってゆくを見る病人 (les naufragés enfin rendus à la terre et les malades qui voient l'aube dissiper leur nuit d'horribles hallucinations) (p. 85)」が抱くのと同じ喜びを密かに覚える。語り手は、「酔ったような顔の下で目を回し、肉欲が満たされるのを待ち望んでいる (les regards chavirés sous les paupières ivres, attendait la satisfaction charnelle) (p. 85)」鰐女に短刀を突き立てる。語り手は自らの勇気に陶醉するが、異形のものとして設定された女に対する憐憫の情は一切感じられない。展開はすべて単純過去で語られ、常ならぬ逸話の様相を呈しているが、思いを遂げられずに理解されず殺される鰐女は、女の何を象徴しているのだろうか。

3-8. 「はしばみのような瞳の女」の語り手

この物語の語り手は、「渴きが嘲笑する…」や「森の裏切り」の語り手と同様、連れ合いのネルを「優れた冒険の相棒」として愛しているが、「愛人」になって欲しいという語り手の望みをネルが受け入れることはない¹³。語り手はその理由を自問しながら、物語の冒頭で自らの女性観を展開する。この語り手は「女性を研究する時間がついぞなかった (moi qui n'ai jamais eu le temps d'étudier les femmes) (p. 95) と言い、「女は煩わしい。奴らのやり口は全く分かん。獣の方がまだましだ (les femmes m'agacent. Je ne comprends rien à leurs façons. Je préfère les fauves) (p. 95)」とも断じている。これは、他の男性一人称の語り手はついぞ表明していない女性観であり、「女どもときたら、どんなことだって有り得るし、確かなことは何もない (avec les femmes tout est possible et que rien n'est certain) (p. 96)」と、少なくとも男女の間には根本的な無理解があることを自覚しているだけ、この人物が自省的であることを物語っているようにも思われる。語り手によれば、「あらゆる女は意識的にせよ無意識にせよ、男どもに対して秘密の憎しみを抱いている (la haine secrète que toute femme, consciemment ou inconsciemment, recèle contre les hommes) (p. 95)」のであり、「多くの女は雄に本能的に恐怖心を抱いている (Il y a beaucoup de femmes qui ont instinctivement horreur du mâle) (p. 96)」のである。

この語り手はまた、自身の男性観についてもこう述べている。

Les hommes sont des cochons, voyez-vous, de simples cochons : c'est d'ailleurs leur unique supériorité sur les femmes, qui ont parfois la faiblesse et le tort d'être bonnes... (p. 97)

男どもは豚だ。お分かりかな。単純な豚なのさ。それにそれは、善良であるという弱みと過ちをしばしば持っている女どもに対して、男どもが唯一優れている点なのだ。

このような自覚があり、「ネルは本当の女ではない (Nell n'est pas une vraie femme) (p. 96)」あるいはネルは「兄弟愛のようなもの (une affection fraternelle) (p. 96)」を自分に注いでくれているといいながらも、それでもやはり二人の友情の根底には「疑いの、憎しみでさえあるような腐敗した器がある (une vase corrompue de soupçon, de haine même) (p. 97)」としている。自らのうちに高まる欲望を充足させようと挑む語り手を、ネルは冷たく阻むばかりなのである。

13 「彼女もまた、はしばみのように茶色い瞳の乙女だった (Elle aussi était une vierge brune comme une noisette) (p. 97)」と、ネルはおそらく処女のままであったことが後に示唆されている。

je voulus lui faire partager le désir sournois qui peu à peu s'était glissé dans mes veines, je me heurtai à sa volonté rigide, ainsi qu'à une muraille de fer. (p. 97)

私は血管の中に少しずつ滑り込んでくる腹黒い欲望をあの女と分かち合いたいと思ったのに、鉄壁のように堅固なあの女の意味にぶつかってしまったのだった。

このように頑ななネルをそれでも愛しながら、自分の愛人に絶対になろうとしないことを、「あの女のあの態度を許すことは決してないだろう。たとえ臨終の床にあっても… (Je ne le lui pardonnerai jamais, non, pas même à mon lit d'agonie) (p. 97)」と語り手は読者に明かしている。

だからと言ってこの語り手は、「うらはらな慎しみ」の語り手のように、力づくで接吻を奪うようなことはない。もっとも、語り手がそれに挑んだときに、女は語り手の眉間を殴って撃退し、また、決して抱擁を受け入れない女にいら立った男が、「あんたに抱かれるくらいなら、墓蛙を呑み込む方がいいわ (J'aimerais mieux avaler un crapaud que de me laisser embrasser par toi) (p. 98)」と拒否する女に、墓蛙を突き付け「この蛙をすぐ飲み込め、でなければお前を力づくで抱いてやる (Avale-le tout de suite, ou je t'embrasse de force) (p. 98)」と迫ると、女は目の前で蛙を呑み下して見せる。女の唇に軽蔑の念が浮かぶのを語り手は見逃さない。

Un mépris inexprimable serpenta sur ses lèvres minces, lèvres d'ascète et d'ermite. (p. 98)

あの女の薄い唇に、名状しがたい軽蔑が蛇のようにうねっていた。あれは苦行僧か隠者の唇だ。

この一件以来語り手は意欲を挫かれ、絶えて女を抱こうとは思わなくなったと語っているが、このことで「死ぬほど女を恨んだ (Et je lui en voulus mortellement) (p. 98)」とも告白している。

この一件ののち、それでも語り手に対して「限りない愛情を抱いている (j'ai infiniment d'affection pour toi (p.98))」と言い、友情の証に語り手を鹿狩りに連れ出す。女の「真心のこもった優しさ (une tendresse passionnée) (p. 100)」と「美しく黄色い夜 (une belle nuit jaune) (p. 99)」のためか、「何か感傷的なものが馬鹿のように身の内で泣く (En moi pleurnichait sottement quelque chose de sentimental) (p. 100)」のを感じた語り手は、あの墓蛙の一件が自分の中でまだくすぶっているのでさえなければ、ネルに愛情を持つことが出来たのかもしれないと語っている。

Je lui aurais même pardonné à elle, l'amour stupide qui me faisait souffrir. Je serais devenu crédule et confiant, comme les tout petits. J'aurais fait, pour elle et par elle, des actions méritoires et désintéressées. [...] Afin de me rapprocher d'elle, j'aurais été doux comme elle. (p. 100)

私を苦しめているあの理不尽な愛も許してやれるだろう。私はほんの幼い子どもたちのように、信じやすくすべてを任せられるだろう。この女のために、そしてこの女によって、私は有益で無私の行為を出来るかも知れない。(…) この女に近づくために、私はこの女と同じように優しくなれるかも知れないのだ。

しかしこの後カヌーに乗った二人は熊に追われ、逃げる先には滝の音が聞こえてきて、熊に食われるか滝壺に落ちるかという命の瀬戸際に立たされることになる。このような非常時に至って、「絶望のように猛り狂った愛のほとばしり (Un élan d'amour, furieux comme le désespoir) (p. 102)」に語り手は突き動かされ、再び女の愛を乞う。

« Puisque nous allons mourir tous les deux, ma chérie, mon aimée... Puisque nous allons mourir dans dix minutes, dans cinq minutes, dans trois minutes, peut-être... Donne-moi tes lèvres... Laisse-moi t'embrasser sur la bouche... Et je mourrai plus heureux que je n'ai vécu. Je serai même content de mourir. » (p. 103)

「私たちは二人とも死ぬのだから、いとしい女よ、我が愛する女よ…。あと10分で、5分で、3分で私たちは死ぬのだから、たぶん…。お前の唇をおくれ。口づけをさせておくれ…。そうすれば私はこれまで生きてきたよりも幸せに死ぬだろう。死ねて嬉しくさえあるだろう。」

しかし女は、愛していると口では言いながら語り手の申し出を拒み、望みを捨てず死に立ち向かわなければならぬと語り手を諭す。結局滝は小さなもので、滝壺に落ちた二人は静かな流れに漂い、熊も追跡を諦めて立ち去ってゆくところで物語は終わる。命の瀬戸際とはいえ己の弱さを露わにしてしまった語り手はもはや言葉を失っている。

このように、『雌狼を連れた貴婦人』に配されている男性一人称の語り手は、それぞれに来歴も異なり語り口も異なっているものの、好色さや凶暴性、そして独りよがりといった、いわば一般に男性的とでもいうべき特徴を共通して担わされていることがわかる。また、そのような性格を付与された語り手たちは、客体として描き出されながら結局は自分の思い通りにならない、それぞれの対象の女に翻弄されているかのように見える。このようにして明らかにさ

れる男女間の本質的な無理解は、自己を閉ざして男を中に踏み込ませようとはしない女主人公たちの毅然とした態度によってさらに浮き彫りにされるのであるが、それについては稿を改めて論じることにはしたい。